九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

中世後期における「…コソアレ。」形式 : 現在方言との関連から

矢毛, 達之
中村学園大学非常勤講師

https://doi.org/10.15017/8902

出版情報：語文研究. 100/101, pp.15-26, 2006-06-02. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

中世後期における「…コソアレ。」形式

――現在方言との関連から――

矢毛達之

内容

一　はじめに
二　現在方言における「コソ…已然形」
三　中世後期の状況
　三―一　本節の目的
　三―二　具体的検討
　三―二―一　「…コソアレ。」形式の検討
　三―二―二　丁寧表現「…コソ御座レ。」形式の存在
四　中世後期における特徴の史的検討
五　おわりに

一　はじめに

日本語史上大きな出来事である係り結びの崩壊については、既に多くの論考がなされ、検討が加えられて来た。その中で、已然形を文終止に配するコソの係り結びに関しては、近年、半藤英明氏[注1]、山田昌裕氏[注2]らによる構文的側面からの研究などで、実態の把握が進みつつある。また、方言国語史の立場からも、現在方言として九州[注3]などに見られる「コソ…已然形」の残存例が検討され、小林隆氏[注4]・大西拓一郎氏[注5]らによる論が提出されるなどの考察がなされている。今後、求められるのは、これら様々な研究成果を有機的に重ね合わせる、広い視野に立った研究であろう。実際、その一つの試みとして、「とりたて」の視点からコソを含む種々の助詞を捉えた研究[注6]

などが既になされている。

しかし一方で、例えば日本語史上の各時期における、係助詞に関わる表現についての詳細な検討は、依然として課題であると言って良く、「コソ…已然形」の用いられる発話例についても、より多角的な考察が必要と思われる。

そこで、本稿では、現在方言における係り結びの残存について、中央語史とどの様に関わるのかという歴史的な経緯をより明らかとすることを目指し、その具体的な方法として、「コソ…已然形」が崩壊してゆくとされる中世後期の例について再検討を行う。検討に際しては、現在方言においてもその用例が認められ、中世後期の状況との関連を探る上で手掛かりとなると思われる「…コソアレ。」という文末の形式に注目する。検討に用いる資料としては、狂言・『天草版平家物語』・抄物・『捷解新語』など、当期の口語を反映したものとされる文献をとりあげる。

二　現在方言における「コソ…已然形」

本節では、現在方言において「コソ…已然形」の使用例がどの様な特徴を示しているのか、大西氏[注7]・小林氏の論[注8]に従いつつ確認した上で、それが中世後期における「コソ…已然形」の文献例とどう関わるのかという問題の所在を述べる。

大西氏によれば、「コソ…已然形」は西日本に偏って残存しているが、八丈方言でも良く用いられる。コソの結びは一般用言と補助動詞「ある」の結びとに大別出来、各々条件表現（「風こそ　吹け　雨は降らん」〈岐阜県飛騨[注9]〉・「言い出したのはお前でコソ　アレ　わしではない」〈島根県益田市・那賀郡・大原郡・隠岐〉）、および文末表現（ホンナコトユータケンド　ウチコソ　ワルケレ〈そんなことを言ったけれど、私が悪いのだ：徳島県三好郡・美馬郡〉・「それコサレ」〈そのことだよ：滋賀県甲賀郡〉）を有する。これら条件・文末の各表現は、まずは古典語の残存と考えることが出来よう。

しかし、「ある」の結びの場合、一般用言には見られない特殊な用法として、条件形式をとりたてる条件表現（「マメナリャこされ　長生きがでけたんや」〈大阪府〉）・反語（「知ってコソ！」〈知るものか！：宮崎県東臼杵郡諸塚村〉）・安堵（アメガフラデコサエ〈雨が降らなかったからよかったものの…：島根県大原郡木次町上熊谷〉）などが認められるという。これら特殊な用法の内、反語のそれについては古典語にも用例が指摘されている[注10]。その他の用法については、方言独自の展開と考えて良さそうに思われる。

この様な現在方言の状況が形作られるに至った背景には、

種々の理由が考えられよう。ただ、いずれにしても、一般用法・特殊用法を併せた現在方言の諸例から覗える点に、コソとアレとの強い共起志向がある、と言って良い様に思われる。この点について、大西氏は「コソアレという形での固定的使用がコサレなどの融合形を生み出し、一語的性格を帯びるようになったことが大きく働くと考えられる」[注11]と述べておられる。また、小林氏は、特に文末表現（見方によっては「終助詞」的な用法とも言えよう）の例に関して論じられた中で、「「まず、終助詞化の前段階として、もとになった「こそあれ」で終わる形式の多用が想定される。特に「でこそあれ」の慣用的使用が終助詞化の重要な基盤となったと思われる」[注12]と説かれている。

つまり、細かな捉え方には違いがあるかも知れないが、両氏とも、現在方言の状況が成り立つまでに「…（デ）コソアレ。」なる形式の多用があった、という推論をなされている訳である。[注13] ここからすれば、中央語で係り結びが行われた末期とされる中世後期の文献資料にも、「…（デ）コソアレ。」形式の例の頻出といった様な、現在方言での状況と関連のありそうな事実が見出せそうに思われる。

そこで、次節では、中世後期の文献資料にあらわれるコソの諸例を検討する。

三　中世後期の状況

三―一　本節の目的

本節では、現在方言における「コソ…已然形」の残存の手掛かりを探る意味で、中世後期の諸例について検討を行う。その際特に、現在方言においても見られる「…（デ）コソアレ。」という形式をとる例に注目する。

三―二　具体的検討

三―二―一　「…コソアレ。」形式の検討

本項ではまず、「…コソアレ。」の形式に注目しながら、狂言台本における例をとりあげる。

例えば、『天理本狂言』[注14]では、用いられているコソの総数二一七例[注15]に対して、已然形で文を結ぶものは一四三例（六五・九％）を数える。なお、坂詰力治氏[注16]らの調査からも分かる通り、中世後期においてコソの結びに已然形をとる例は、概ね一資料中過半数の例を占めているようである。この内、結びにアレをとるものは最も多く、三〇例となっている。[注17]

さらに、これら用例の内、「…コソアレ。」の例が二七例と、アレの結びの九割を占めている。次に、用例を掲げる。

(1) それは、太刀を、挟うだと、云ものでこそ、あれ
（昆布売、大名→昆布売）

(2) 身共が年月の行法もかやうのためてこそあれ、食うたものを祈りださうと云
（土産山伏、山伏→山人）

(3) 近頃、満足申てこそあれ
（釣狐、坊主→男）

これらの内、(1)(2)は指定のデを承けるもの、(3)は接続助詞テを承けるものである。これらの表現について少し考えると、(1)の例は、大名に「太刀を（手に）持て」と言われた昆布売りが太刀を腋に挟んでしまったのを言い立てるもので、「そりゃ…というものじゃ無いか。」という様な気息を感じさせる。次に、(2)の例は、「自分の長年の修行も（食べてしまった物を祈り出す）まさにそのためにあるのだ」といった、強い確言性を有すると言えそうである。

次に、『虎明本狂言』[注18]では、コソの総数三二七例[注19]に対して已然形で文を結ぶものは二三六例（七二・二%）、その内結びにくるのは、多い順にタレ（六二例）・ケレ（三七例）・アレ（二八例）などである。[注20] アレは三番目であるが、その中で「…コソアレ。」の例は約六割の一七例を占める。次に、用例を掲げる。

(4) いやそれはいるまやうでこそあれ
（入間川、大名→入間の何某）

(5) それはからかさのことでこそあれ
（ほねかわ、住持→新発意）

(6) いていはふずるは、ふべんなる所を見せてはづかしうこそあれ
（今まいり、大名→今参）

これらの内、(4)(5)は『天理本狂言』の(1)と同様の「…デコソアレ。」の例であって、表現についても、(1)に類似した言い立ての気息が認められよう。(6)も、「…恥ずかしいことだ」という様な確言性は『天理本』の(3)に近似すると思われるが、ここでの接続は形容詞連用形ウ音便を承けるものとなっている。この「形容詞連用形＋コソアレ。」は、後にも少しく触れるが、現在方言においては少なくとも特に類例の多さが指摘出来る形式という訳では無いようであって、中世後期との相違点と言うことになりそうである。

さらに、抄物資料について少しく触れる。例えば、『漢書列伝竺桃抄』[注21]には、次に掲げる、

(7) 君ノ所レ為ヲハ皆ヨイト云ヲワルイト云タハ実ニヨイ大臣テコソアレト云タソ
（三一ウ14）

(8) 本文ニ誦言如酔ト云時ニハ誦言ハ詩書ヲヲホエテ其ハサウテハサウヌカウテコソアレナントゝ云事ヲハキゝタウモナサニ
（五六ウ15）

(9) 我之此ニ後ヌル不思議ノ事テコソアレソ（七六ウ4）

(10) 此ノヤウニ公方ノ御用ニタツモノワカウコソアレト云テソ（六四オ2）

などの例が拾える（ちなみに、『漢書列伝竺桃抄』においては、コソを承けて已然形で文を結ぶ例は六三例であるが、この内アレの結びは三分の一の二一例を占める）。また、『史記抄』[注22]にも、

(11) カウ云ハ只一向為秦取周タモノテコソアレソ（二・一〇七―12）

(12) ヨケレハホメ、アシケレハ、ソシルテコソアレソ（一四・六六―12）

などの例が見える。これらの例の内、(10)の例は副詞（斯う）を承けるものであるが、外形面からすると、『虎明本狂言』での形容詞連用形ウ音便を承けた(6)の例に準じて考えて良いであろう。他の多くの例では、「…デコソアレ。」の形式が用いられており、小林氏の所説との関連を覗わせるものとなっている。[注23]

この他、『天草版平家物語』[注24]には、次に掲げる、

(13) 天が下に住まうずる限りは、ともかうも清盛の仰せを背くまいことでこそあれ（一〇〇―4、母とじ→祇王）

という、やはり「…デコソアレ。」の例が見られる。原拠本[注25]に近いとされるテクストの当該箇所では、次に掲げる様に、

(13)原 天が下にすまん程は、ともかうも入道殿の仰せをば背まじき事にてあるぞとよ（覚一本・上一〇〇―10）

となっており、編者が「清盛の仰せに背くことなどあってはならない」という様な強い表現の一端に関わる形式として、「でこそあれ」を用いたものとも考えられる。

以上、中世後期の口語資料とされるものについて、「…（デ）コソアレ。」の形をとる表現の例を中心に見て来た。その際、指定のデを承ける場合の例が多く見られ、また形容詞連用形ウ音便を承ける例なども確認出来た。

三―二―二 丁寧表現「…コソ御座レ。」形式の存在

前項では、中世後期の口語資料とされるものについて、「…（デ）コソアレ。」の形式の例を中心に確認して来た。しかし、待遇表現など別の視点から検討すると、さらに中世後期と現在方言との相違点があらわれるようである。ここで、『捷解新語』（原刊本）[注26]における例を中心にとりあげ、前項とはやや異なる場合の例についても検討を行う。

周知の通り、『捷解新語』は、日本・朝鮮両国の役人による儀礼的な会話を収める書物である。本書には全部で一一三例のコソが用いられているが、この内已然形の結びをとるものは六四例と、約五七％に上っている。

さて、『捷解新語』の「コソ…已然形」六四例中で特に目立つのは、結びに敬語動詞御座ルをとる例である。この例の数は四八例と、已然形の結びをとる例の四分の三に当たる。(注25)次に、その例を掲げる。

⑭ 始めに御対面仕り目出たうこそ御座れ。（四1オ、主）

⑮ さては出船の日も定まって目出たうこそ御座れ。（八24ウ、主）

⑯ 御使いは某でこそ御座れ。（三1ウ、主）

⑰ 此れ様に目出たい事、何方も同前でこそ御座れ。（六2ウ、主）

⑱ 目出たさ礼に余ってこそ御座れ。（七22ウ、客）

⑲ 折節好い順風に是まで着かしられて、大慶にこそ御座れ。（六14オ、客）

これらの例の内、⑭⑮は形容詞連用形を承けるもの、⑯⑰は指定のデを、⑱は接続助詞テを、⑲は形容動詞連用形をそれぞれ承けるものである。⑲の例を除くと、既に前項で確認した「…コソアレ。」形式の例と同様の接続となっている。また、一見して分かる通り、『捷解新語』においてコソと御座レとが共起した場合の例は、全て「…こそ御座れ。」という形をとってあらわれている。もちろん、前述した通り、資料の性格上の特徴を考えねばならないが、この「…（デ）コソ御座レ。」の例は、決して当期中孤立したものでも無いようである。

例えば、狂言台本の内、『天理本狂言』では、次に掲げる、

⑳ 色色お肝煎、恭こそ御ざれと云　（岩橋、男→仲人）

㉑ 近頃恭こそ御ざれ、さらはかう通らせられい　（禰宜山伏、亭主→禰宜）

などがあり、また、『虎明本狂言』では、次に掲げる、

㉒ かたじけなふこそござれ、おしへさせらるゝさへ御ざらふに、ゑほしまでかさせられて、過分に御ざる　（鶏聟、聟→教え手）

㉓ 今日は、日もよう御ざるに、御ふしながら御いでかたじけなうこそ御ざれ　（二人袴、聟→親）

㉔ もはや参る、なごりおしうこそござれ、これがいきわかれじや　（武悪、武悪→太郎冠者）

などの例を拾うことが出来る。⑳～㉔の諸例は、いずれも形容詞連用形を承けるものと覚しく、⑭⑮の例との類似の他、前項で触れた⑹の例との関連が覗われる。さらに、『虎清本

狂言』[注28]でも、御座レの古い形式である御座アレの例として、次に掲げる、

(25) これへの御出かたじけなふこそ御ざあれ
（きんや、すっぽ→あと）

という例が見られる。この例も、同様に考えて良いであろう。

次に、『天草版平家物語』においては、前項での例と同じくやはり編者によって挿入されたものとして、次に掲げる、

(26) あら無惨や，実盛でこそござれ
（一七一―18、樋口→木曾）

(27) 右馬．平家の北国へ下られた事をも続けてお語りあれ．／喜一．さても飽く期もない人でこそござれ
（一六〇―1、喜一→右馬允）

(28) 右馬．この茶を飲うで息を継いで，まちっとお語りあれ．／喜．はあ，これはかたじけない：冥加もないお茶でこそござれ：ごくと見えまらしてござる
（二八五―1、喜一→右馬允）

の様な類例が見られる。いわゆる原拠本では、(26)のくだりは「アナ無暫ヤ、真盛ニテ候ケリ」（四三五頁）となっており、(27)(28)の例については創作と思しいものである。言うまでも無く、これらは指定のデを承けるものである。

この様に、中世後期の口語資料とされるものについては、少なくとも「…（デ）コソアレ。」の例の他に、「…（デ）コソ御座レ。」という形式の例も多く存すると言えそうである。この「…（デ）コソ御座レ。」形式についても、現在方言では少なくとも容易に類例の指摘出来るものでは無いようである。

ところで、「…（デ）コソ御座レ。」形式については、安田章氏の諸論考[注29]に精査され、当代において「挨拶表現」として残存していた係り結びの一環として論じられているが、本稿ではいささか別の構文的な視点から、既に確認した「…（デ）コソアレ。」形式と同様に、一括して考えてみたい。

つまり、御座ルはアリの丁寧語形としての用法を有し、本動詞としても、次に掲げる、

(29) 是はめつらしひ名で御ざるが、さだめて子細がござらふ／中々、子細こそあれ
（虎明本狂言・腹不立、出家→所の者一）

(30) して其子細があるか／中中子細こそござれ
（虎明本狂言・花争、太郎冠者→主）

の二例を比較すれば明らかな様に、アリでは丁寧さが不足する場合、いわば入れ替える形で用いられている。さらに言えば、御座ルはアリのヴァリエーションと考えることが出来そうである。また、これらの例において、コソアレ／御座レが

何を承けるかという点からも、特に指定のデ・形容詞連用形などで共通するため、中世後期の「…コソアレ。」と「…コソ御座レ。」とを構文面で同様に取り扱うことが可能では無いかと考えられる訳である。(注30)

従って、中世後期における「…コソアレ。」形式は、その丁寧形として「…コソ御座レ。」というヴァリエーションを有すると捉えても差し支え無い様に思われる。

以上、本項では、中世後期の口語資料とされる文献中に「…（デ）コソ御座レ。」という形式が少なからず見られる事実について検討した。その際、指定のデを承ける場合の例と共に、形容詞連用形を承ける場合の例なども多く確認出来、これらの点から「…（デ）コソ御座レ。」は「…（デ）コソアレ。」の丁寧表現形として捉え得るのでは無いか、ということを述べた。

四　中世後期における特徴の史的検討

前節までで見て来た、中世後期における「…コソアレ。」形式の状況を、現在方言でのそれに比較すると、共通する様な例も少なからず認められるが、形容詞連用形を承ける例の多寡や、丁寧表現形としての「…コソ御座レ。」の例の存在が主な相違点として考えられる。これら、中世後期における特徴と考えられる点については、その形成に種々の要因が関わっていよう。本稿ではまず、構文史的な面から一応次の様に考えてみたい。

古代語において、係り結びという現象は、次に掲げる、

(31)　中将殿こそ、これより渡り給ひぬれ。

（源氏物語(注31)・夕顔）

の例の様に、客体的な事柄に対する言語主体の態度を、一文中に係助詞と、文末の結びとの二つの切れ目に分かれて示すものである。これに対して、近代語では、言語主体の態度は専ら文末のみで示される。この相違については、「論理化」と言われる流れが存したことが指摘されている。(注32)すなわち、古代語から近代語への移り行きの中で、構文面では事柄を一まとまりにして叙述することが多くなり、係助詞による文中の断裂が好まれなくなって、係助詞は文中から文末へと追いやられてゆくというものである。この流れをコソについて示すものが、「二　現在方言における「コソ…已然形」」の節で述べた様に現在方言でも確認されているコソ単独での文末用法であり、また本稿でとりあげている「…コソアレ。」形式では無いかと考えられる。

山口堯二氏(注33)は、文中に立ち難くなったコソが中世後期まで

存し得た要因の一つに、次に掲げる、

(32) はやうこの殿は、我をあぶりころさんとおぼすにこそありけれ。（大鏡[注34]・伊尹伝）

(33) それをなづけて五時教といふにこそはあなれ。（大鏡・序）

などの例の様に、判断を示すニアリに介入したりして、「文中の係り用法でありながら、むしろ確言的にその文の判断を措定する意味合いが強ま」った点を挙げられる。この見方は、本稿で検討している「…コソアレ。」形式についても示唆的であろう。

つまり、「…コソアレ。」形式は、外形的に明らかな様に、「コソ…已然形」の係り結びが文末に用いられているものである。また、「三　中世後期の状況」の節で少しく見て来た様に、話者の判断そのものを強調するかの様な用法として捉えることも可能な様に考えられる[注35]。これらからすると、「…コソアレ。」形式についても、古代語から近代語へという流れの中で構文史的に把握出来るかも知れない。

実際、指定表現との関連で考えると、中古から中世を通じ「…ニ／ニテ／デコソアレ。」形式が漸増している事実が指摘されている[注36]。私に、『延慶本平家物語[注37]』における「…コソアレ。」形式の状況を調査したところ、『延慶本平家』中でコソは一五〇〇例以上用いられているのに対し、「…コソアレ／候へ。」の例は、次に掲げる、

(34) 子ノ悲サハ誰モ同ジ事ニテコソアレ。（上二五二―3、具平親王→道長）

(35) 主上カクテオハシマセバ、世ノ政ニ口入スル計ニテコソアレ。（上三二〇―3、法皇→宗盛）

(36) 凡ハ老テ子ヲ失フハ、枯木ノ枝ナキニテコソ候へ。（下二七七―11、侍従→宰相殿）

(37) 心憂キ事ニコソ候へ。（上四百六―5、仲綱→頼政）

(38) イツシカ誰々モ恋シクコソ候へ（下四八五―12、六代→母上〈手紙〉）

など十数例を数えるが、総数に比し決して目立って多いとは言えず、中世後期との相違を覗わせる。

また、現在方言ではその例を認めることが容易とは言えない丁寧表現形については、あるいは敬意逓減の問題が関わっているかとも推測される[注38]。中世後期において、「…コソ御座レ。」の形式が少なからず用いられていれば、それだけ一まとまりの表現として認識される度合いも増すものと思われる。確かに、敬意逓減によって、丁寧表現形がコソを含んだかたちで早く衰退したとすれば、外形としては積極的な敬意を示さない形式である「…コソアレ。」形式が現在方言で残存し

ていることの説明も一応つきそうであるが、さらに考えることとしたい。

以上、本節では、「…コソアレ。」形式について、主に構文史的な面から考察を試み、併せて丁寧表現形と現在方言との関連をも検討した。

五　おわりに

「コソ…已然形」の係り結びについて、現在方言に見られる「…コソアレ。」形式の例を手掛かりとして、中世後期の文献資料における諸例を中心に検討して来た。これをまとめると、次の様になるかと思われる。

・「…コソアレ。」形式は、特に狂言台本や抄物資料に少なからず確認出来るが、特に指定のデを承ける場合の例が少なからず認められ、現在方言との関連を思わせる。

・一方、現在方言との相違点として、「…コソアレ。」形式の丁寧表現形と言うべき「…（デ）コソ御座レ。」形の例も、『捷解新語』他の資料において少なからず認められる。その際、形容詞連用形を承ける場合の例を複数指摘出来、中世後期としての用法が覗える。

・中世後期の「…コソアレ。」形式の例は、構文史的に係助詞が文末へと追いやられてゆく様な流れの一環として把握出来るのでは無いか。

今後の課題としては、中世後期から現在に至る時期において、「…コソアレ。」形式をはじめ「コソ…已然形」の用法がどの様に変遷を遂げ、現在方言に繋がっているのかを明らかにすることが考えられる。具体的には、丁寧表現形と現在方言との関連や、「…コソアッタレ。」・「…アラウズレ。」など助動詞を附加する例の検討、近世期における文献資料の例その他を精査する作業などが挙げられよう。

注

注1　『係助詞と係結びの本質』（新典社・平成一五年）、『係結びと係助詞「こそ」構文の歴史と用法』（大学教育出版・平成一五年）。

注2　「名詞文「AガBダ」型の発生とその拡大の様相―主格表示「ガ」と係助詞「ゾ」「コソ」との関連性―」（『国語学』五四ノ二、平成一五年四月）など。

注3　大分県内で行われることが知られ、この他例えば『講座方言学』（国書刊行会・昭和五八年）・「1　九州方言の概説」（上村孝二氏執筆）では、佐賀県杵島郡内や鹿児島県枕崎市・種子島などにも見られるという（二四頁）。

注4　『方言学的日本語史の方法』（ひつじ書房・平成一六年）第三部第三章「副助詞「コソ」の歴史」など参照。

注5　「方言における「コソ～已然形」係り結び」（『国語学』五四ノ

四、平成一五年一〇月）参照。

注6　沼田善子・野田尚史氏編『日本語のとりたて ― 現代語と歴史的変化・地理的変異』（くろしお出版・平成一五年）参照。

注7　注5参照。

注8　注4参照。

注9　各々の方言例の出典等、省略に従った。

注10　山田孝雄氏『平安朝文法史』（宝文館書店）、松尾捨治郎氏『国語法論攷 追補版』（白帝社）、半藤氏注1文献など参照。

注11　大西氏注5文献。

注12　小林氏注4文献五三〇頁。

注13　この他、九州方言学会編『九州方言の基礎的研究 改訂版』（風間書房・平成三年）には、大分県長湯方言（大分県直入郡直入町長湯）の「文法」記述の項に、

「「コソ」に関する、いわゆる係結の現象が、「コサレ」という特定の形に限って観察される。

○ヨナガジャコサレ　ソゲー　シェカンジェン　イージャネー　カノ。

夜長だものそんなに急かなくてもいいではないかね。

○オマエガ　ワリンジコサレ　ハロー　タツル　ナ。

おまえが全く悪いんだもの、腹を立てるな。

「コサレ」は、「こそあれ」に由来する。この「コサレ」は、一体の機能者として、上接部をしめくくり、述部の修飾の限定にあずかる。」（三二一頁・神戸宏泰氏執筆）

とされる。この記述も、かつての「…コソアレ。」表現の多用を裏付けるものでは無いだろうか。

注14　北原保雄・小林賢次氏『狂言六義全注』（勉誠社）によった。

注15　謡などを除く。

注16　「室町時代における「こそ」の係り結び」（『近代語研究』第八集、平成二年九月）。

注17　ちなみに、『天理本』における已然形の結びとしてアレの他に多いものは、タレ（二九例）・指定ナレ（一七例）などで、後に触れる御座レは五例である。

注18　池田広司・北原保雄氏『大蔵虎明本狂言集の研究 本文篇上・中・下』（表現社）によった。

注19　注15に同じ。

注20　ちなみに、後に触れる御座レの結びは八例である。

注21　『続抄物資料集成第四巻 漢書抄』によった。

注22　亀井孝・水沢利忠氏『史記桃源抄の研究 本文篇』（学術振興会）によった。

注23　さらに、春日和男氏によれば、『五逆秋』（無門関抄、慶長一五年聞書貞享三年書写）においても、

「已然形デアレは、（矢毛注、他のデアルの活用形に比し）用例が比較的少なく、多くは係助詞を介入させて、

チヤクト聞タデコソアレ、実地ニ此レガ為ニ説イタデハ無イゾ。（八四ウ）

他后ニ疑ハレマジキ為デコソアレ（五九オ）

の如きコソアレの係結形を示すものが多い。」

（『存在詞に関する研究』五一一頁・風間書房、昭和四三年）

ということであって、やはり少なくとも抄物資料にあっては「…デコソアレ。」という表現が多く用いられていたことを裏付けるようである。

注24　江口正弘氏『天草版平家物語対照本文及び総索引』によった。

注25　本稿では、いわゆる原拠本のテクストは覚一本を岩波「日本古典文学大系」本に、百二十句本を『斯道文庫蔵百二十句本

平家物語』（汲古書院）に各々よった。なお、『天草版平家物語』と原拠本との関係については、清瀬良一氏『天草版平家物語の基礎的研究』（渓水社・昭和五七年）参照。

注26　京都大学国語国文学会編『三本対照捷解新語』によった。以下、特にことわらない限り、『捷解新語』と言うこととする。なお、『捷解新語』（原刊本）にはコソの濁音形ゴソの例が計一八例あるが、本稿では一括して取り扱った。

注27　已然形以外の形で文を結ぶ場合は三七例であるが、この内御座ルを結びにとるものは、次に掲げる、

・仰山目出たうこそ御座る。（三13オ、主）

・万事心中に任せず、回らん所は、其方も此方も同前でこそ御座る。（四29オ、客）

など一八例である。

注28　古川久氏編『狂言古本二種』（わんや書店）によった。

注29　『外国資料と中世国語』（三省堂・平成二年）、『国語史の中世』（三省堂・平成八年）、『国語史研究の構想』（三省堂・平成一七年）、「コソの中世」（『国語国文』七四ノ八、平成一七年八月）、「アドリブの意味」（『国語国文』七五ノ一、平成一八年一月）など参照。

注30　『虎清本狂言』に見られる、

・ちかごろありがたうこそ候へ（なきあま、比丘↓僧）

という例も、古めかしい丁寧表現形として、やはり「…コソアレ／御座レ。」同様に考えて良いであろう。

注31　岩波「日本古典文学大系」本によった。

注32　大野晋氏『係り結びの研究』（岩波書店・平成五年）・阪倉篤義氏『日本語表現の流れ』（岩波書店・平成五年）など参照。

注33　「疑問助詞「やらん」の成立」（『語文』五三・五四合併号、平成二年三月）参照。

注34　岩波「日本古典文学大系」本によった。

注35　ところで、「…デコソ御座レ。」や形容詞連用形を承ける例の存在という点を考えると、中世後期における「コソ…已然形」の残存する構文的類型として「名詞文」（三上章氏『現代語法新説』〈くろしお出版〉など参照）が認められる、と言うことも出来そうである。ただ、動詞文の文末にはたらいていると思しい「…テコソアレ。／御座レ。」（用例(3)・(18)参照）の例も見られ、また現在方言においても「…テコソ（アレ）。」の例が確認されている（大西氏注5文献など参照）ため、さらに考えたい。

注36　森野崇氏「係助詞「こそ」の機能―源氏物語を資料として―」（『早稲田大学教育学部学術研究』三七、昭和六三年一二月）・山口堯二氏「「にあり」式連語係助詞介入小史」（『国語と国文学』八二ノ一一、平成一七年一一月）など参照。

注37　北原保雄・小川栄一氏編『延慶本平家物語　本文篇上・下』（勉誠出版）によった。

注38　安田氏「コソの中世」（注29参照）によれば、「…コソ御座レ。」の衰退については、より新しい「丁寧語尾」ゴザリマスルの成立が与っているとされ、やはり敬意逓減との関連が指摘されている。

（やけ　たつゆき・中村学園大学非常勤講師）